The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	幕末明治期の詠物詩 ： 大沼枕山一派の詩風をめぐって
Author(s)	合山, 林太郎
Citation	語文. 2010, 94, p. 11-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69150
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

語文94（2010・6 大阪大学国語国文学会）

幕末明治期の詠物詩

——大沼枕山一派の詩風をめぐって——

合山林太郎

はじめに

詠物詩とは、動植物や器物などの物を取り上げ、その描出に意を用いる詩体のことである。その起源は『楚辞』「橘頌」などに求めることができるが、盛んに制作されるようになったのは、六朝時代以降と言われる。その後の発展の様子は、たとえば、『御定佩文斎詠物詩選』などの詠物の詩のみを集めた巨大な詞華集の存在からうかがえよう。

詠物詩は、近世日本においても多作されているが、幕末[1]明治初期のそれが、当時の詩壇のあり方を考えるうえで重要な切り口となることは指摘されていないようである。本稿では、大沼枕山（文政三年〈一八一八〉-明治二四年〈一八九一〉）や植村蘆洲（天保二年〈一八三〇〉-明治一八年〈一八八五〉）らの詠物詩制作の状況を検討し、また、彼らに対する森春濤（文政二年〈一八一九〉-明治二二年〈一八八九〉）や槐南（文久三年〈一八六三〉-明治四四年〈一九一一〉）たちの発言をも取り上げ、この時期の詩壇が抱えていた問題の一端を明らかにする。[2]

一　枕山一派の詠物詩制作

まず枕山の詠物詩制作の状況について概説する。枕山の詠物詩制作は、若年期に集中している。天保一一年（一八四〇）頃、枕山は、『房山集』に続く自身の第二詩集として詠物詩一〇一首を集めた『枕山詠物詩[3]』を刊行している。弘化三年（一八四六）頃、それを増補し計一七八首を収め、親交のあった梅痴の詠物詩一六四首を集めた『梅痴詠物詩』とともに合刻再版した。

枕山の別集『枕山詩鈔初編』（安政六年〈一八五九〉刊）には、目立った数の詠物詩は収録されていないが、枕山一派における詠物詩への関心は、彼の高弟植村蘆洲の詩集から看取できる。『蘆洲詩鈔』（文久二年〈一八六二〉刊）には、嘉永元年（一八四八）以降の作品が収められるが、毎年数首ずつ、七律の詠物詩が収録

されている。このうち、嘉永四年作成の「金線草」「臘八粥」などは、枕山の主催する詩会の課題であったことが確認できる。[4]

安政二年（一八五五）は、詠物詩が多作された年であり、枕山に「詠物詩二十首」（『枕山詩鈔二編』巻中、文久元年刊）が確認できる。また、枕山の門人及び周辺の詩人の作品を収めた『同人集三編』（安政二年刊）[5]は、梅花詠ばかりを集めており、一種の詠物詩集と言える。枕山自身の作としては「梅花次趙甌北韻」「同上次張船山韻」などがこの詩集に収録されている。

明治期に入ると、蘆洲が、計一一二首の詠物詩を収載した『蘆洲詠物詩』（明治一四年〈一八八一〉刊）を刊行しており、一派のなかで継続的に詠物詩が作られていたことが判る。

以上に見た枕山たちの詠物詩制作は、菊池五山の指導によるものである。枕山は「余、少壮のとき、五山菊池先生に師事す。先生、詠物を以て宗と為す。故に余は為る所の詠物七律二百余首、既に刻して之を伝ふ」（「蘆洲詠物詩序」）と述べ、蘆洲の詠物詩制作について「余の少壮に倣へる者なり」（同）と評している。

天保一一年の時点で、五山は、「余、人をして詩を学ばしむるに、率ね詠物を以て課題と為す。会は月に一次、殆ど且に三紀〔筆者注　三六年〕にならんとす」（「枕山詠物詩序」）と述べているので、文化年間から、門下に詠物詩を課していたことが知られる。

五山の詠物詩については、『摂東七家詩鈔』（嘉永二年刊）などの詞華集によって見ることができる。天保期以降、江戸に住み、五山と親しく交わった梁川星巌や、五山と同郷で江戸でも親しく交わった牧野黙庵には、「五山堂課題」と注記された詠物詩が多数あり、五山を中心とする詠物詩の文化圏を見て取ることができる。[6]こうした五山を中心とするサークルにおいて、枕山は詠物詩人としての技量を養ったのである。

もっとも、詠物詩は、幕末期の漢詩壇全体で見た場合、広い支持を得ていたわけではない。幕末以前、すでに詠物詩は頼山陽から批判されていた。山陽は、「書詠物詩選後」（『山陽先生書後題跋』、天保三年〈一八三二〉序）と「五声五影詩」（『山陽詩鈔』巻六、天保四年刊）詞書の二篇の文章において、詠物詩批判を行っている。山陽は、唐代の詠物詩と元・謝宗可や明・瞿佑らのそれとを比較し、前者においては物に託して作者自身の志や感情が詠われているのに対し、後者は技巧のために作られたと論じ、あるべき詩の姿から遠く離れていると主張している。また、詠物詩の表現が複雑であることを難じて、詠物詩が謎かけのようであり、題を隠して作品のみを読むと何を詠っているのか理解できないと述べている。その上で、同じ題詠であれば、より自由に詠うことのできる詠史詩を推すと論を進めている。

とくに詠物詩が難解であるという批判に対しては、五山が反論し、「題を蓋ひ、之を読みて其の何の詠為るかを知る。詠物の妙、究竟、此に在り」、すなわち、題を見ない場合でも理解できるものこそ、詠物の上乗の作であると主張している（『山陽詩鈔』巻六）。

枕山も、詠物詩批判に対して「世の庸儒、詠物詩を作る者を認めて、以て小家数と為す、是れ甚しき謬りなり」（「蘆洲詠物詩序」）と述べ、詠物詩を小人物の詩とする見方を否定している。

ただ、山陽が標榜した詠史詩の流行は、幕末期において現実のものとなっており、[7] 五山は、山陽が、『日本楽府』（文政一三年刊）などの詠史詩を発表して以降、「而るに吠声の徒、扼腕激昂、皆な咏史を以て自ら励み、連篇累牘、喧聒して措かず」（「梅痴詠物詩序」）、すなわち、山陽を模倣する者が多く出、いたずらに歴史上の事件や人物を論難すると歎いている。

先に述べた『蘆洲詠物詩』刊行に際し、枕山は、「嗚呼、俊利は詠史満眼の世に在りて、依然として詠物詩を作り、以て其の操を変へず。是れ余の最も賞する所、唯だに其の詩のみならず、以て其の人を知るべきなり」（「蘆洲詠物詩序」）と、詠史詩が流行するなかで詠物詩集を刊行した蘆洲の人柄を激賞しており、当時、詠史の流行の前に、詠物詩が力を失っていったことが推定されるのである。[8]

二　枕山の詠物詩の詩風

詠物詩の評価軸としては、六朝時代の賦の持つ遊戯性や寓意性が挙げられる。また、杜甫「孤雁」などに見られる詩人の感情を物に托して述べる抒情性もその一つである。

揖斐高氏は、中国のように詩に政治的要素が入る余地がなかった近世日本においては、詠物詩には「物を客観的に写生しながら、日常的な小さな世界の身辺的抒情を托す」[9] という性質が強く表れるが、化政期末年以降、「詠物詩集が作例書として重宝され、また詠物詩が初心者のエチュードとして創作されるようになる」[10] と述べている。本稿で扱う枕山たちの詠物詩は、後者の性質が強く現れた作品群として取り扱われている。

詩を見るかぎり、枕山たちの詠物詩は、先行の詩句を参照しつつ製作されている。次に見る「秋蠅」という詩は、寒さが増すなかで衰える蠅について詠ったものであるが、先行の詩句を利用しながら詩を構成した、よい例である。

營營猶自恋杯盤　営営として　猶自ほ杯盤を恋ふ
豆大形骸漸欲殘　豆大の形骸　漸く残せんと欲す
趁霽點頭麾不去　霽を趁ひて点頭し麾へども去らず
向陽頓脚任他彈　陽に向ひて脚を頓し　弾かるゝに任他す
窓間鑽紙隨斜陽　窓間　紙を鑽して　斜陽に随ひ
鑪底投灰避晚寒　鑪底　灰に投じて晩寒を避く
霜力一鏖無幾日　霜力　一鏖　幾ばくの日無し
吟詩甘受拂眉端　詩を吟じ　甘じて受けん　眉端を払ふを

詩は、あくせく食べ残しの皿へ向かおうとしていた蠅が、だんだん力を失ってゆく様を描き出す。その後、蠅の微細な動きについて、うなずき、また脚を踏みならすかのようであると述べ、さらに、蠅の様子に関して、夕陽の差す紙窓を通り抜けたかと思えば、炉にたまる灰で暖を取ると詠っている。最後に、詩を吟じる間に蠅が視界に入ってくるが、寒波が来て一掃される日も近いの

だから、あえて追いやることはすまいと結んでいる。

蠅の生態を詠っているが、その描写のかなりの部分は宋詩に負っている。たとえば、第三句の、蠅を追い払うことができないと詠う箇所は、「麾之不去蠅登盤（之を麾へども去らず　蠅　盤に登る）（宋・范成大「殊不悪斎秋晩閑吟五絶（第二首）」承句）を、第五句の、夕日のなかを蠅が紙窓をうがつと述べた部分は、「窗間但見蠅鑽紙（窓間　但だ蠅の紙を鑽するを見る）」（蘇軾「戲贈虔州慈雲寺鑑老」第三句）を取り入れている。

また、『枕山詠物詩』冒頭に配された「元日牡丹」の詩は、題のレベルで先行作を参照した例と言えよう。

醉面霞蒸楊太眞　醉面　霞蒸す　楊太真
錦帷捲盡艶粧新　錦帷　捲き尽して　艶粧　新たなり
何圖富貴無雙色　何ぞ図らん　富貴　無双の色
恰値陽和第一辰　恰かも陽和　第一の辰に値はんとは
徐紫籠煙金屋曉　徐紫　煙に籠む　金屋の曉
魏紅映日玉樓春　魏紅　日に映ず　玉楼の春
高情不許蝶蜂狎　高情　許さず　蝶蜂の狎るゝを
只與梅妃相對親　只だ　梅妃と相ひ対して親しむ

詩は、元旦に花咲く牡丹は、酔って上気した楊貴妃のようであり、錦の帳を掲げ、あでやかな装いを凝らしていると述べている。また、富貴の花である牡丹に、正月に出会うことの驚きを表明している。その後、徐紫や魏紅といった牡丹が、もやにつつまれた豪奢な屋敷や、曙光のさす高殿で咲いている様を描写し、結びに、気高い牡丹は、蜂や蝶がそばを飛ぶことを許さず、ただ、梅妃、すなわち、やはり新春一番に咲く梅の花と親しくするのみであると詠っている。

詩の詞書には、「醉楊妃、煙篭紫、映日紅、玉楼春は、皆な牡丹の名品にして牡丹譜に出づ」と書かれており、頷聯に牡丹の花が詠み込まれている。また、梅妃とは玄宗皇帝の妃、江采蘋のことであり、ここでは、牡丹を楊貴妃にたとえていることと対応関係にある。

この詩は発想を先行の作品に負っている。牡丹には、寒牡丹など冬に咲く品種があり、詩にも「冬日牡丹」といった題があるが、元日に花開く牡丹というのは、特殊な設定である。これは、清・袁枚「元日牡丹」（『小倉山房詩集』巻二六）という作品に流行の起源がある。袁枚の詩との具体的な類似の箇所を指摘すると、たとえば、尾聯は、「想與梅妃爭早起／嚴妝同對雪飛時（梅妃と早起を争はんと想ひて／厳妝して同に対す　雪の飛ぶ時）」という袁枚の詩句（第三首、転結句）を用いたものである。

このほか、枕山の詠物詩についての志向を象徴するのが、南宋の詩人楊誠斎の詠物詩に対する高い評価である。枕山は、七言律詩の詠物詩について杜甫や白居易にはじまり、蘇東坡や楊誠斎において盛んになったと述べ、とくに楊誠斎については「余、誠斎を以て古今第一と為す」という認識を示している。その後、錢謙益や査初白、袁枚や趙翼などの清代の詩人が好んで詠物詩を作っているのも「皆な東坡、誠斎を学ぶ者なり」、すなわち、宋代詩

人に習ったものであると論じている。詠物詩人の系譜に、技巧に長けた謝宗可、瞿佑を入れていない点に、枕山の考え方をうかがうことができる。

もっとも、以上に見た枕山の詠物詩の特徴には、やはり、五山の影響が看取できる。たとえば、先に見た「元日牡丹」については、五山に「元日牡丹倣袁倉山」（『天保三十三家絶句』巻上、天保九年〈一八三八〉刊）という作品があり、これに梁川星巌が次韻（「和池無絃元日牡丹戯倣其体三首」『星巌丁集』巻二、天保一二年刊）、さらに黙庵にも同題の作がある。いずれの作も、牡丹が、花の王、あるいは富貴の花と呼ばれていることを踏まえ、元旦の宮廷の様子を詠っている。

また、楊誠斎についても、五山は「暢斎の詠物、頗る清整なるもの多し（略）余、商榷するに以て廷秀（筆者注　楊誠斎の字）の下、宗可の上と為す」（『五山堂詩話補遺』巻二、文政五年〈一八二二〉年頃刊）と述べている。同時代の暢斎という詩人の作を引きつつ、それが廷秀、すなわち楊誠斎には及ばないものの、詠物で名を成した元の謝宗可よりは上であると評しているのであり、詠物詩人として高い評価を与えていることが判る。

三　森春濤・槐南らの詠物詩に対する言及

筆者が、枕山たちの詠物詩に関心を持つのは、それが枕山と森春濤・槐南一派との関係を捉え直す契機となるのではないかと考えるからである。

幕末・明治期の江戸・東京詩壇は、弘化期以降、枕山が一時代を築くが、明治七年より後は、新たに上京した春濤が勢力を伸張することとなる。枕山が、明治政府の役人たちを諷刺する漢詩を制作したこと（『東京詞』）、さらに春濤が自身の詩社に多数の新政府の官僚文人を抱えたことなどもあり、両者は、通常、守旧と進取、反維新政府と親維新政府などの二項対立の構図で描かれることが多い。しかし、春濤、槐南ともに枕山の詠物詩に言及しており、両派の関係を再考察する材料となるのである。[11]

春濤は、五山や枕山の詠物詩について、肯定的に捉えている。すでに述べたように、山陽と五山との間には、詠物詩のあり方をめぐって応酬があった。このやりとりを引用しながら、春濤は「千載の下、二家の長ずる所、以て見るべきなり」と述べ、山陽の詠史詩、五山の詠物詩、双方がそれぞれの詩人の個性に合っており、優れた作品であると論じている。その上で、自身の詩派は、題画詩など両者とは異なる詩風を目指すと述べている。また、春濤の門人岩渓裳川は、東京時代の春濤が山陽の詠史詩と枕山・梅痴の詠物詩を比較しながら、山陽を賞賛するかたわら、「又梅痴枕山の詠物も亦た然り。其の妙悟の所は両家の孤詣に属し、後人之を学ぶも西施の顰みに倣ふのみ」（「詩話感恩珠」『作詩作文之友』一号、明治三一年〈一八九八〉一一月）と発言したと回想している。

一方、明治一〇年代の春濤門下に台頭した若手漢詩人たちは、詠物詩に対して批判的である。たとえば、槐南は、詠物詩につい

て「胸に寄託なく筆に遠情なし。詩に於て尤も欠くべからざるの一唱三歎の致果して何くにか在るや。則はち佻巧を曲尽すと雖も直ちに是れ児童が唖謎のみ」（森槐南「徳川時代の詩学」『国民之友』一七一号、明治二五年〈一八九六〉一一月三日）と述べ、情感の表出がないことを理由に詠物詩を批判している。その上で、槐南は、「近世、熙熙堂主人（筆者注　枕山の別号）、盛んに詠物を唱へ、其の末流植村蘆洲等が一派に至つて風愈々斯に下り、沾沾たる小言を以て工を炫ひ奇を誇る（下略）」と枕山一派の詠物詩について否定的に言及している。

詠物詩批判は中国の詩論の世界において珍しいものではなく、槐南がそうした批判を念頭に置いていたことは、「彼胸無寄託、筆無遠情。如謝宗可、瞿佑之流、直猜謎語耳（彼れ、胸に寄託無く、筆に遠情無し。謝宗可、瞿佑の流の如きは、直だ猜謎語なるのみ）」（『説詩晬語』）という清・沈徳潛の詠物詩批判の言葉が、槐南の批評中に取り込まれていることから明らかである。

なお、槐南は、自身の蔵書に書入れを行っているが、その中には詠物詩批判を内容とするものもある。たとえば、彼は清代咸豊・同治期の詩人方濬頤の「灯花」（『二知軒詩鈔』巻一）[12]の「不蔓應緣鍊火成（蔓ならざれど縁に応（よ）りて鍊火成る）」という詩句に対して批点を付し、「詠物家の口気にして厭ふべきは、此の種、即ち是なり」と評を書き加えている。「灯花」とは灯心にできる花状の物体であり、槐南は、それを、蔓や実に見立てることを作為的であると否定している。また、雪を白米に喩えて詠った「雪米」（元・薩都剌撰『雁門集』巻一〇）に対しても「思は巧にして語は纖、偶然游戯の作にして存録するに足らず」と評を付している。ただ、こうした形態や色彩的な類似から全く異なる事物を比喩の対象として用いることは、枕山たちの詩には見あたらない。すなわち、以上に見た槐南の批判を、枕山たちの詠物詩に当てはめて理解することはできない。

このほか、春濤門下の若手詩人であった永坂石埭は、師の春濤の詩に対して「妙は首尾貫徹、眉目整然たるに在り。絶て咏物家の口気無し」（森春濤「梅影畳韻八首」に対する評、『新文詩』九二集、明治一六年三月）と述べている。詠物詩を得意とする詩人は、字句に意を用いるあまり、詩の流れが失われがちであるが、春濤の詠物詩にはそのような停滞が見られないと賞賛しているのだが、これも枕山一派の詠物詩を念頭に置いたものではなかったか。このように、枕山一派と春濤・槐南との対立は、詠物詩をめぐる志向の相違によるものとしても理解できるのである。

四　植村蘆洲の詠物詩の詩風

枕山は詠物詩を肯定し、春濤一派、とくに槐南たちはそれに批判的である。ただ、この問題を考える際には、枕山の高弟蘆洲の詠物詩は、幕末期の枕山のそれとはやや異なっていたということにも注意しなくてはならない。

蘆洲の詠物詩には、いくつかの特徴があるが、その一つは、日本の地名や風物を積極的に詩句に取り入れている点である。たと

えば、『蘆洲詠物詩』には「新芳原畔回陽處／靈鷲祠前設祭初（新芳原畔　回陽の処／霊鷲祠前　祭を設くるの初）」（「芋魁」頷聯）など、日本の固有名詞を詠み込んだ詩句が多数見受けられる。

また、「水醃蘿蔔」（『蘆洲詠物詩』）、すなわち、大根の浅漬けを詠った詩もある。

拋擲禪廚舊漬方　禅厨の旧漬方を拋擲し
晶鹽和麹試新嘗　晶塩　麹に和して　新嘗を試む
一枚寧混茄珠紫　一枚　寧ぞ混へん　茄珠の紫
半點仍除粃屑黃　半点　仍ほ除く　粃屑の黄
葱玉輕輕裁雪薄　葱玉　軽軽として　雪を裁つがごとく薄く
瓠犀響冷碎氷香　瓠犀　響は冷かにして　氷を砕くがごとく香し

充他丑旦風流贈　充他す　丑旦　風流の贈
例報開冬演劇場　例報す　開冬の演劇場

詩は、浅漬けが、沢庵漬けなどの禅寺に由来する旧来の漬物の作り方とは別に、塩と麹で新たな味を生み出すと詠い、茄子の紫やしいなの黄と対照しつつ、浅漬け大根の白さについて言及している。その後、浅漬けは、雪を裁断したように薄く、歯で嚙むと氷が割れたような音がすることを述べ、最後に、大根が出回るのはちょうど顔見世狂言が開かれる初冬であるから、きっと役者の風雅な贈り物にも用いられるだろうと言う。

この詩に詠み込まれているのは、浅漬けに関する説明や生活知とでも言うべきものである。『枕山詠物詩』にも、「福寿草」や「桜草」など、日本の風物を詠った作品があるが、それらは中国関係の故事なども交えながら詠っている。蘆洲の作品では、故事や情況描写が、すべて日本の事物となっている。

もう一つ、詠詩対象の風情や姿態から離れた言述が多いことも、蘆洲の詩の特徴である。たとえば、蘆洲は、「帰燕」という題の詩を作っているが、尾聯において燕に関する言葉を媒介として自己の心情に説き及んでいる箇所がある（『蘆洲詩鈔』巻中）。すなわち、「果然浮世危於幕／愧我區區事未拋（果然　浮世　幕よりも危し／愧づ　我れ区区として　事　未だ拋たざるを）」という詩句があるが、これは『春秋左氏伝』襄公二十九年の「猶ほ燕の幕上に巣ふがごとし」という文句を念頭に置いたものである。つまり、燕が幕の上に巣を作ることから、危うい位置にいることを意味する「燕幕」という成語を踏まえ、その幕上の巣よりも危険な俗世間を自身が捨てられないと慨嘆している。

この詩句は、燕と関連する語句の意味によってつながってはいるものの、燕自体が持つ、あるいは、中国詩の伝統のなかで燕が持つ情緒を詠っているのではない。枕山には、同じ「帰燕」（『枕山詩鈔三編』巻下、慶応三年〈一八六七〉刊）という題の詩が存在し、枕山一派には、さらに「来燕」（『枕山詠物詩』）や「新燕」（『梅痴詠物詩』）といった作品が見受けられるが、この「燕幕」の故事を詠み込んだものはない。

このほか、「啄木鳥」（『蘆洲詠物詩』）尾聯には「慚愧書生難拂蠹／毛錐枉自事雕蟲（慚愧す　書生　蠹を払ひ難きを／毛錐　枉（む）

自しく雕虫を事とす)」という表現があるが、これも類似の例と言える。啄木鳥が虫をつつくことを、自身が「雕虫」、すなわち詩文を業とすることに重ねている。

いわば、蘆洲の詠物詩においては、詠詩内容の卑俗化、あるいは、詠詩対象からの乖離が起こっている。先に触れたように、槐南は、詩を感情の表出と見る立場から、技巧や表現に重点を置く詠物詩を批判しているが、その中で、「植村蘆洲等が一派に至って風愈々斯に下り」と述べている。槐南の批判は、こうした蘆洲において枕山一派の詩が変質していったことをも意識している可能性がある。[13]

おわりに

本稿の論旨を整理する。幕末江戸詩壇において力を持った枕山一派は、物の描写や表現に力を置く詠物詩を多作し、また肯定的に捉えている。これは、菊池五山の詠物詩を重視する姿勢を受け継いだものである。

春濤は、この枕山たちの詠物をその最も優れた特徴と考え、彼らと異なる方向を追求し、槐南は、中国の伝統的な詠物批判の立場に立ち、枕山・蘆洲を批判している。さらに、詠物詩のありようから、枕山一派の詩風の変遷の一端をうかがうこともできる。

枕山たちの詠物詩およびそれに関する言説は、幕末明治期の詩壇の動向を見るうえで鍵となる存在であり、看過できない重要性を持つと考える。

注

(1) 本稿では、幕末期を、天保末期以降、慶応三年までと想定している。ただし、必要に応じて、文化文政期の詠物詩の作品や議論について言及した箇所もある。

(2) 停雲会編「詠物詩集一覧」(『玩鴎先生詠物百首注解』太平書屋、一九九一)を参照した。

(3) 書名(内題)は『詠物詩』であるが、本稿では、『枕山詠物詩』で統一する。

(4) 『雪江先生貼雑』(国立公文書館内閣文庫、一九九七-八年)に掲載された「嘉永四年大沼枕山月例詩会課題」による。

(5) 『同人集』については、鷲原知良「大沼枕山選評『同人集』について」(『和漢比較文学』一六号、一九九六年二月)を参照した。

(6) 「月露　五山堂課題」(『星巌丁集』巻四、天保八年の作)、「月色虫声」(『星巌丁集』巻五、天保九年の作)、大沼枕山「新截釣竿　五山堂課題」(『枕山詩鈔初編』、弘化四年の作)など。なお、黙庵については、濱久雄『牧野黙庵の詩と生涯-江戸漢詩性霊派の後勁』(明徳出版社、二〇〇五)を参照した。

(7) 揖斐高「詠物詩についての覚え書」(『井浦芳信博士華甲記念論文集芸能と文学』、一九七七年)。

(8) ただ、枕山は、詠物詩を擁護する一方で、詠史詩も多く制作している。たとえば、『文久二十六家絶句』(文久二年刊)の「読史雑述」など、当時刊行された詞華集に多くの詠史詩が収められている。こうした枕山の詠史詩制作と詠物詩愛好の関係については、今後検討したい。

(9) 揖斐高「詠物の詩」(中村幸彦編『近世の漢詩』汲古書院、一九八六年、後、『江戸詩歌論』、汲古書院、一九九八年所収)。

(10) 注7に同じ。

(11) 前田愛「枕山と春濤―明治初年の漢詩壇―」(『幕末・維新期の

文学』法政大学出版局、一九七二年）は、枕山と春濤の二項対立の図式をより鮮明に打ち出した。鷲原知良「明治期の大沼枕山について―『明治名家詩選』を中心に」（『国文学―解釈と鑑賞』七三巻一〇号、二〇〇八年一〇月）にこうした研究の問題点についての指摘がある。

(12) 槐南の蔵書は、現在、東京大学総合図書館槐南文庫に蔵される。本論で取り上げるのは、『二知軒詩鈔』（請求記号 E45:157）、『雁門集』（同 E45:152）である。

(13) もっとも、こうした方向性の違いには、枕山晩年の詩風の変化が影響を与えていたかもしれない。春濤は、「植村芦洲の如く、〔筆者注　枕山の〕学ぶべからざる所を学びしもの多きは嘆ずべきことなり」と述べ、枕山の欠点を受け継いでしまったと論じている（「詩話感恩珠」『作詩作文之友』八号、明治三一年一一月）。

付記

引用にあたっては、漢文については訓読のみを、漢詩については本文と訓読の両方を掲げたが、一部例外もある。なお、訓読にあたっては、適宜、通行の字体に改めた。

本稿を作成するにあたり、貴重な資料の閲覧を許されました東京大学附属図書館、また、ご教示を賜りました堀川貴司氏、停雲会の先生方、及び『枕山詠物詩』を輪読した大阪大学二〇〇九年度演習参加者に深謝申し上げます。

（ごうやま・りんたろう　本学大学院講師）